只見短歌会

令和三年一月詠草　大塚栄一　指導

多忙なるは丈夫な証と強がりを帰省せる娘を見送る朝に　馬場　八智

ぼたん雪降る様見つつ温みをもあるが如くに心静もる　目黒　富子

十五夜の月の光が寝間に入る戸を繰り見れば昼間のごとし　渡部ゆき子

あの方にあのことなどを想ひつつ時過ぐるままに年の瀬迎ふ　関谷登美子

食欲のあるのは元気の証だと息子（こ）は老ひ母を励まして言ふ　新国由紀子

カメムシの少なき年は浅雪と言はれて来しが早も豪雪　渡部ヨリ子

こぶし苑に歩行難にて入所せりいま亡き姉もこの部屋なりし　新国　洋子

（出詠順）

只見俳句会

一月定例会　宇多喜代子　指導

ドカ雪と予報の村は沈まれり　修一

冬晴れや窓開け放ち足軽く　幸生

熊は山へ里に標の棚いくつ　信

河鳥雪の晴れ間は高く飛べ　都

コーヒーを包む手温む冬景色　洋子

吹雪く夜の昔話や囲炉裏端　味代子

子等を待つカレーを煮込んで冬の暮　弘子

表札をローマ字で出す十二月　睦子

雪降るを太鼓の音が積らせし　恒夫

初市の赤ベコの首ちょい昼寝　礼

悔しさに石けとばして冬帽子　一穂

ただ黙し初雪の窓眺めをり

予報超え一夜にどっと雪の嵩

コロナ禍に逢えぬと告げ来吹雪く夜

曲り屋に被りし雪は暖かし

旅の後炬燵にお茶を運ぶ時

おでん食べ楽しい夕食孫うかれ

凍み豆腐亡き母しのぶ料理ぐさ

寒禽やむくろの温み手に残り

雪折の記念樹今も語り継ぐ

ゆるやかなブイの撓みや鴨の陣

極月のダムのたもとにダム見あぐ

春兆す赤子ロボット動きして

ドカ雪に家守の梅の枝折れす